

「生と死を考える教育」

平成9年「心の教育緊急会議」

10月「心の教育充実に向けて」

平成10年5月 県立教育研修所内に事務局を置いて「生と死を考える教職員研修プログラム開発委員会」を設置

・教職員に生と死を考える教育を推進するための実践的指導力を培う研修プログラムの研究・開発

(参考資料)

1 教職員研修プログラム

2 教育研修所における教職員研修プログラム・協議のまとめ

平成10～13年度「小・中・高等学校 生と死を考える教育（研究）講座」を実施

3 教職員研修モデルプログラム

3.1 小学校

- 1 研修の目的 生と死を考える教育の必要性と学校において今後どのように取り組んでいくべきかを考える。
- 2 研修計画 第1回：生と死を考える教育についての基本となる考え方を学び、現在行っている学校教育活動の中で「生と死」に関連する事柄を考える。
第2回：生と死を考える教育を推進するにあたっての問題点を話し合い、学校として今後どのように取り組むべきかを考える。
- 3 第1回研修会
 - (1) 研修場所 研修室（会議室）
 - (2) 研修方法 講義法、討議法
 - (3) 準備物 メモ用紙
 - (4) 展 開

研 修 過 程	留 意 点
1 趣旨説明 ○ 心の教育緊急会議のまとめ (兵庫県教育委員会) ○ 生き方を学ぶ性教育 (兵庫県教育委員会)	○ 司会者が趣旨説明する。 ・阪神・淡路大震災 ・神戸市須磨区の小学生連続殺傷事件 ○ 生と死を考える教育についての基本的な共通理解を図る。
2 生と死を考える教育について実際に取り扱った事例を研修する。	○ ビデオや新聞記事などを活用する。 ○ 生と死の教育の現状を理解する。
3 生と死についての各自が持っているイメージを語り合う。	○ 参加者が自分の体験をもとにイメージを話し合う。 ○ 子どもたちにどう生と死を教えるかを考える。 ○ 生と死は表裏一体であることから「生」に着目する。
4 絵本などの具体的な作品を通して話し合いを広げる。(注1 参照)	○ 状況によっては、グループに分かれて話し合う。

研 修 過 程	留 意 点
<p>5 生と死を考える教育を進めるにあたって、子どもたちが置かれている状況について考える。</p> <p>6 生と死を考える教育に関してこれまで実践してきたことを振り返る。</p> <p>7 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校や学級の実態、家庭や地域の様子について話し合う。 ○ 生と死を考える教育が子どもたちの実態を考慮しながら、どのように展開すべきかを考える。 ○ 日常生活の中で、特に「生」について学んでいることを振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・各教科（国語、理科等）、道徳、特別活動の各領域で ・安全教育の中で ・性教育における生命尊重を通して ○ 6で取り上げた事柄について整理し、生と死を考える教育の実践化に向けて共通理解を図る。（総合的な学習の時間において扱うことが考えられる。）
備 考	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な人を亡くされた体験者などを講師として招く。 ○保護者と連携しながら進める。 ○子どもたちに対して生と死を考える教育を行う場合、必要以上に死に対する恐怖心を与えないよう十分配慮する。

(注1) 具体的な作品としては、次のような作品が考えられる。

「ダギーへの手紙」

(E・キューブラー・ロス 著、アグネス・チャン 訳、はらだだけひで 絵)

校成出版 1998年 本書 p. 58 参照

「さようならっていわせて」

(ジム&ジョアン・ポウルディン 著、きたやまあきお 訳)

大修館書店 1997年 本書 p. 57 参照

(注2) 第2回目の研修会は、各校の実態に応じて行う。

3.2 中学校

- 1 研修の目的 生と死を考える教育の必要性を認識する。
- 2 研修計画 第1回：生と死を考える教育の必要性を認識する。
第2回：生と死を考える教育の必要性についての認識を深める。
- 3 第1回研修会
 - (1) 研修場所 会議室、図書室
 - (2) 研修方法 討議法
 - (3) 準備物 OHP、感想用紙、ビデオ、参考図書
資料プリント（注1 参照）

<p>生まれることについては、優れた性教育の実践が共有財産になりつつあるけれど、死ぬということについては、教育は手つかずではないか。</p> <p>人間らしい生を追求するには、人間らしい死を、同時に考えなければならないのに——。</p> <p style="text-align: center;">配偶者を喪った人たちの新生のための会「響き」主宰 「新しい家庭科WE」創刊者 半田 たつ子</p>
<p>生きることと死ぬことは表裏一体の関係にある。よき生を生きるには時に死に想いを致すことが必要だ。</p> <p>「生きる力」を大切にす教育のなかに、死のことが取り上げられるのは、むしろ当然のことというべきだろう。</p> <p style="text-align: right;">心の教育緊急会議 座長 河合隼雄</p>

(4) 展 開

研 修 過 程	留 意 点
1 絵本「100万回生きたねこ」を音読し、感じたことを2つ以上書く。 (注2 参照)	<input type="checkbox"/> 短時間で、感想を書きとめる。(OHP、感想用紙)
2 発表	<input type="checkbox"/> 数名に発表を依頼する。 <input type="checkbox"/> 研修テーマに沿ったものがよい。
3 研修のねらいを説明する。	<input type="checkbox"/> 資料プリントなどを参考に提案者が説明する。
4 「生と死の教育」の中の『生と死をみつめる』を利用して、特別養護老人ホームで暮らしている老人の生き方を考える。 (注3 参照)	<input type="checkbox"/> 参加者が施設長の立場に立ち、老人達に生きる希望を与えるには、どのような配慮をすればよいのか具体的に意見を書く。(感想用紙)

研 修 過 程	留 意 点
<p>5 5～6人のグループに分かれて意見を出し合う。</p> <p>6 参加者全員の意見交換をする。</p> <p>7 ビデオ「死とどう向き合うか」(NHK ソフトウェア 発行) 第1巻の「死を見つめる」を視聴する。</p> <p>8 次時の予告</p>	<p>○ できるだけ多くの意見が出るようにする。また、1で書いた感想との関連も話し合いたい。</p> <p>○ あまりにもかけ離れた意見が出たときには、資料の内容に戻り、確認する。</p> <p>○ 生と死を考える教育の内容に触れる。ビデオの後半の15分を上映する。(ビデオ機器)</p> <p>○ ビデオが無い場合は「死とどう向き合うか」を参考にする。(注4 参照)</p>

(注1) 心の健康ニュース No. 215、No.216 付録 少年写真新聞社 1998年

(注2) 「100万回生きたねこ」(佐野 洋子 文、絵) 講談社 1977年

本書 p.54、p.61 参照

(注3) 「生と死の教育」(樋口 和彦、平山 正実 編) 創元社 1985年

第一部「生と死をみつめて」(重兼 芳子) 本書 p.67 参照

(第4) 「死とどう向き合うか」(アルフォンス・デーケン 著) NHKライブラリー

1996年 本書 p.64、p.66 参照

4 第2回研修会

- (1) 研修場所 会議室、図書室
- (2) 研修方法 討議法
- (3) 準備物 ビデオ、OHP、参考図書
- (4) 展 開

研 修 過 程	留 意 点
<p>1 前回の研修の内容を振り返る。</p> <p>2 高木 慶子 英知大学教授の講演ビデオを視聴する。(注1 参照)</p> <p>3 講演内容を整理する。 ・生と死の教育の各段階 ① いのちの大切さにポイントを置く 4つの予防 ② 社会的現象から見る『死』 ③ 『死』の現実 ・教師が持つべき留意点</p> <p>4 身近な喪失体験を語り合う。</p> <p>6 絵本「おおきな木」を朗読する。 (注2 参照)</p> <p>7 まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今回のねらいを明確にする。 ○ 講師を招聘してもよい。 ○ 本書 p.4~p.8、p.21~p.22 参照 ○ 肉親やペットの死を通じて、「生」をどのように意識したらいいかにポイントを置く。 ○ 講師を招聘してもよい。 ○ 話しやすい雰囲気をつくる。 ○ OHP ○ 死と向き合うことにより、生と死の教育への理解を深める。

(注1) 講演題：「生と死を考える教育」(パネル・フォーラムから)

講演日時：平成10年10月13日(火)

講演場所：県立教育研修所

本書 p.3 参照

(注2) 「おおきな木」(シェル・シルバスタイン 著、本田錦一郎 訳)

篠崎書林 1976年

3.3 高等学校

- 1 研修の目的 生と死を考える教育の必要性を認識する。
- 2 研修計画
 - 第1回：生と死を考える教育の基本となる考え方を学ぶ。
 —— 文献、映画、講演などを利用して（注1 参照）
 - 第2回 死を意識した瞬間について話し合う。
 —— 自分自身の体験を振り返って
 —— 身近な人を失う喪失体験の意味を考える。
 —— ビデオの視聴（注2 参照）
 - 第3回：「生と死を考える教育は必要か？」を考える。
 —— 発想法などを使って ——（注3 参照）
 - 第4回：生と死を考える教育を実践する。
 —— ロング・ホームルーム（LHR）において ——

3 第4回研修会

- (1) 研修の目的 LHRにおける生と死を考える教育
- (2) 研修場所 会議室
- (3) 研修方法 グループ・ワーク
- (4) 準備物 メッセージ・カード
- (5) 展 開

研 修 過 程	留 意 点
1 趣旨説明 2 ウォーミングアップ ・20代、30代、40代、50代でグループを組む。 ・各グループで、自分の誕生日、日を紹介する。 ・生まれ月によって、再度グループ分けをする。 3 インストラクション ・状況設定： 「あなたは、これから宇宙への旅に出ます。地球に帰ってくるのは、いつになるかわかりません。あなたの家族、あなたの友人へ別れのメッセージを書きましよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ○ 司会者が挨拶を兼ねて趣旨説明を行う。 ○ 年齢以外の基準でグループ分けしてもよい。 ○ お互いにリラックスできる雰囲気をつくる。 ○ 様々な年齢構成のグループにする。 ○ LHRでの実践を想定したシュミレーションである。 ○ 「考えるための枠組み」を提示している。 ○ 「生と死」を考える機会の提供 ○ メッセージ・カードを配付

研 修 過 程	留 意 点
4 エクササイズ ・グループ毎に一人ずつ書いたメッセージを読み上げる。 ・一人ずつのメッセージに対する感想を述べ合う。	○ 感想を述べるときには、できるだけ肯定的な感想を述べ合うよう注意する。
5 シェアリング メッセージ・カードを書いたときの気持ち、感想を言ってもらったときの気持ちを自由に話し合う。	○ 高校生にとってどんな意味があるかも話し合いに加える。 ○ 実際にLHRで行うときの留意点などについても話し合う。 ○ LHRでの実践を想定した体験であると同時に、職員間の相互理解を深める意味もあることを確認する。
6 まとめ	

(注1) ・映画：「生きる」(黒澤 明監督)、「螢の墓」(高橋 勲監督)、「病院で死ぬということ」(市川 隼監督)等

- ・ビデオ：「死とどう向き合うか」(NHKソフトウェア発行)
 第7巻「死についての生涯教育(1) ～幼児から青少年のために」
 第8巻「死についての生涯教育(2) ～大学生・中高年に向けて」

(注2) ビデオ：「死とどう向き合うか」(NHKソフトウェア発行)
 第2巻「悲嘆のプロセスのなかで」

(注3) 本書 p.36 参照

(注4) 第4回研修会では構成的グループ・エンカウンターの手法を用いている。

用語解説

- ・インストラクション：リーダーがエクササイズの目的、やり方、留意点を教示することをいう。
- ・エクササイズ：構成的グループ・エンカウンターを構成する主要な要素で、心理面の発達を促す課題のことをいう。主たる内容は対人行動であり、これが誘発剤となってふれあう人間関係をつくる。
- ・シェアリング：わかちあいという意味である。エクササイズを通して、気づいたり感じたりした、自分のことや他者のことなどをホンネで伝え合い、共有し合う。構成的グループ・エンカウンターの柱の一つである。

※ 用語解説は社団法人日本図書文化協会等主催

「育てるカウンセリング実践講座 1999 京都会場 研修要項」を参照した。

3.4 教育研修所

教育研修所における教職員研修プログラムは、平成10年度 現職教育 小・中・高等学校 生と死を考える教育（研究）講座において実施した内容を紹介する。

- 1 研修の目的 児童生徒に「自他の命の大切さ」、「生きることの大切さ」を考えさせ、学ばせるための教育実践の方法を編み出し、生と死を考える教育の推進を図る。

2 研修内容

第1回

〔講義〕 生と死を考える ——「心の教育緊急会議」のまとめから ——

英知大学 教授 高木 慶子

〔講義〕 心の教育の在り方

兵庫教育大学 教授 上地 昭

〔協議〕 生と死の教育の位置づけ

「生と死の教育を推進するために」というテーマのもと、現状と課題をKJ法により明らかにした。校種別に（小学校、中学校、高等学校）に分かれ、模造紙にまとめた。

（注1）KJ法については、本書 p.40 参照

（注2）校種別のまとめについては、本書 p.32 参照

〔発表〕 協議のまとめ

校種別にまとめた模造紙をもとに、班長が議論した内容を発表。予定時間を超えて、受講者から疑問や戸惑いが多く出された。性教育の中で扱っていることや教科書の中の生と死の扱いについて話し合うことからスタートした。

〔講義〕 いのちの大切さを考える

奈良大学 助教授 大町 公

第2回

〔講義〕 心の教育とは

兵庫教育大学 助教授 富永 良喜

〔講義〕 命の教育

県立健康センター 所長 河村 剛史

〔協議〕 私の考える生の教育・死の教育

第1回目の講座以降にまとめた研究の内容や課題を発表しあった。生と死に関連した書物の紹介をしたり、インターネットを通して検索した内容についても話し合った。

〔自主研修〕 今後の研究の方向づけ —— 課題の明確化と研究の方向 ——

各自の研究テーマを決定し、その研究内容の概略をまとめた。第3回目の講座で研究論文が提出できるように打ち合せをした。

〔講義〕 生きるということ・死ぬということ

英知大学 教授 高木 慶子

第3回

〔実習〕 エンカウンターの見点から

ひょうごっ子悩み相談センター カウンセラー 中内 みさ

〔発表〕 研究報告

受講者一人ひとりが研究発表をした。プレゼンテーションにも工夫が見られ、活発な意見交換がなされた。

〔協議〕 研究報告を通して

研究報告の続きを行うとともに、講座全体を通して生じた研究課題の解決に向けて議論を深めた。

〔講義〕 教師として、人として

—— 中・高等部における実践を中心にして ——

関西学院中学部 部長 尾崎 八郎

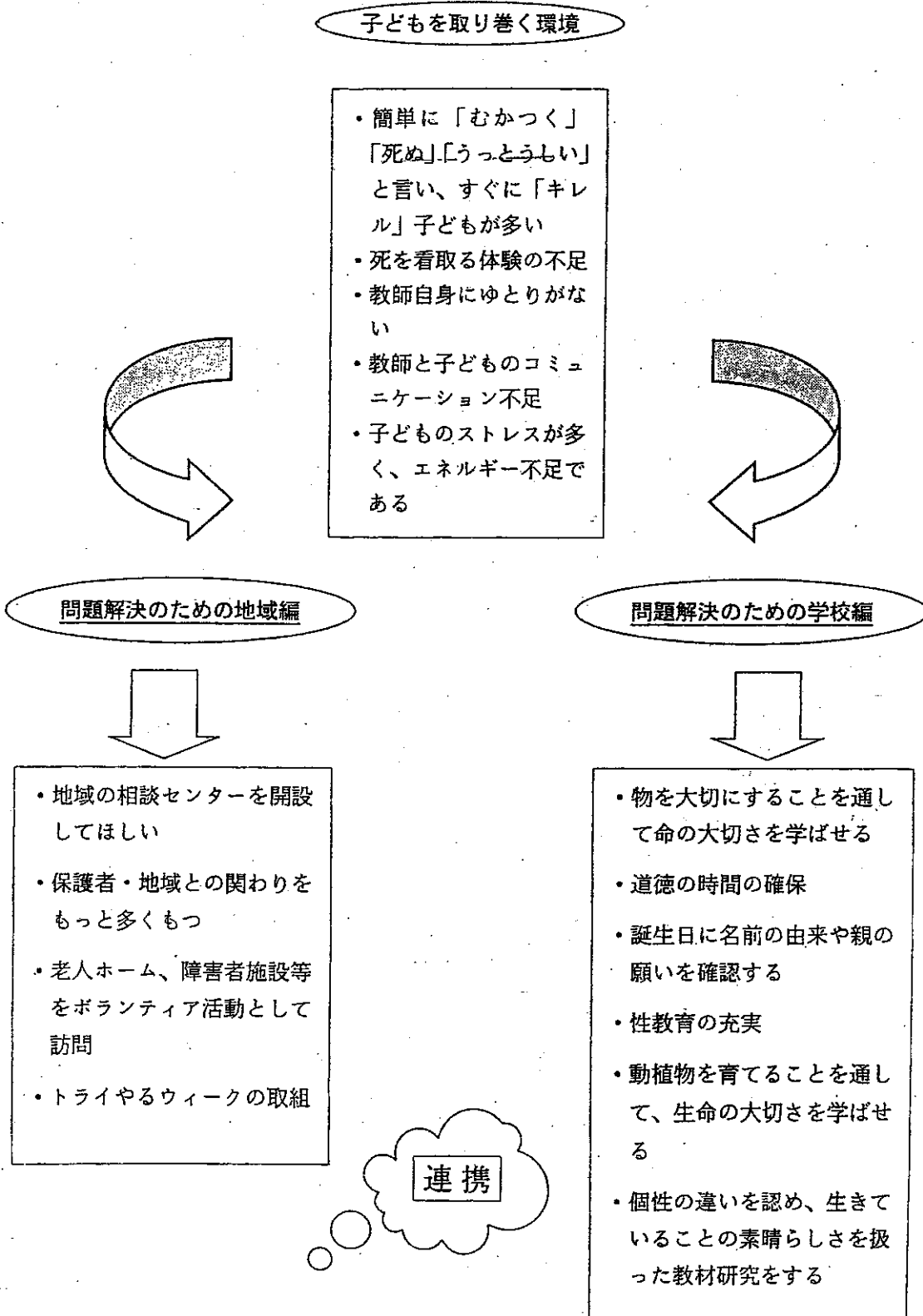
〔講義〕 教科を通して「生と死」を考える

—— 中学校における保健の授業を中心にして ——

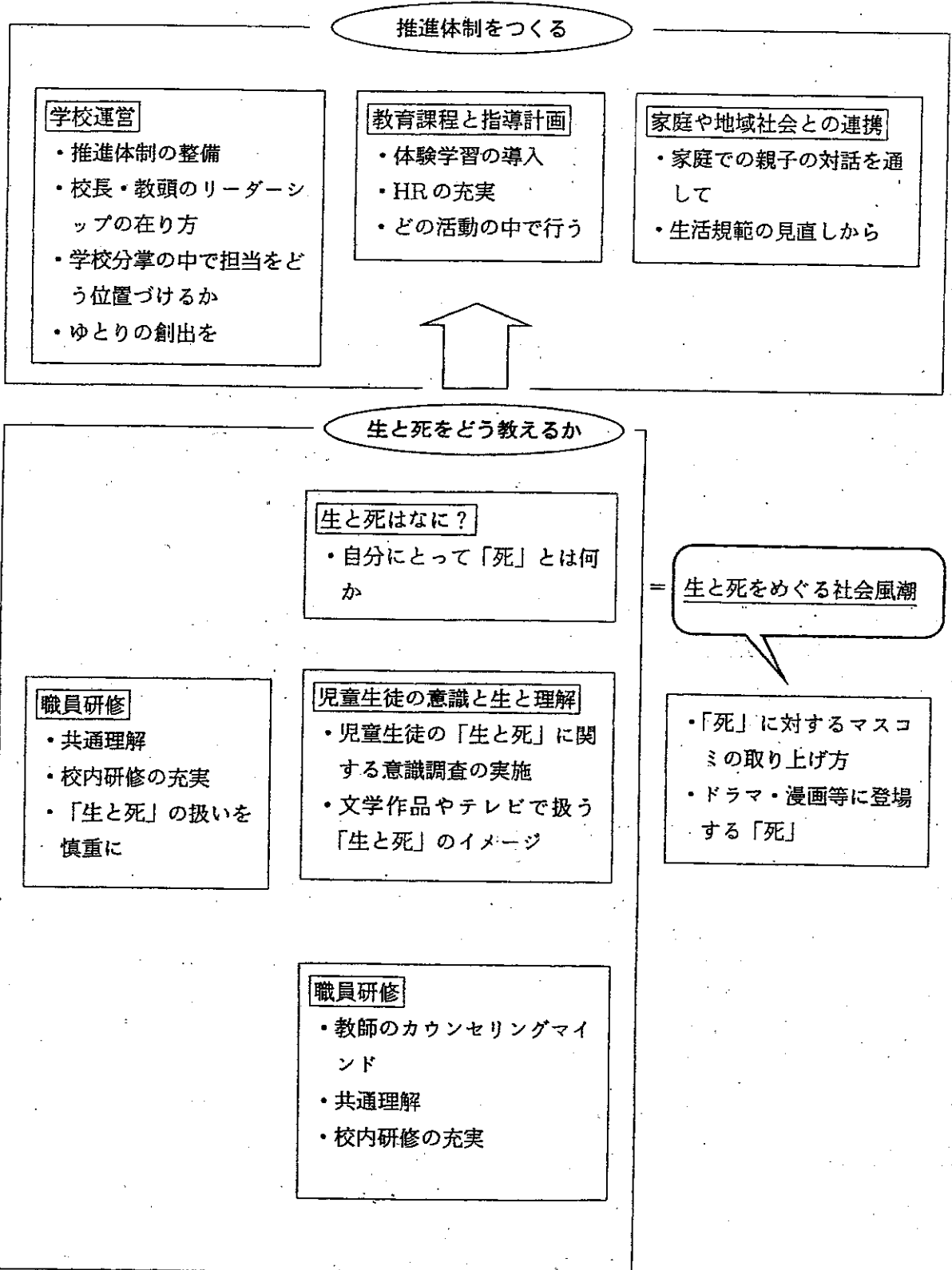
東大阪市立長栄中学校 教諭 山下 文夫

小・中学校1班

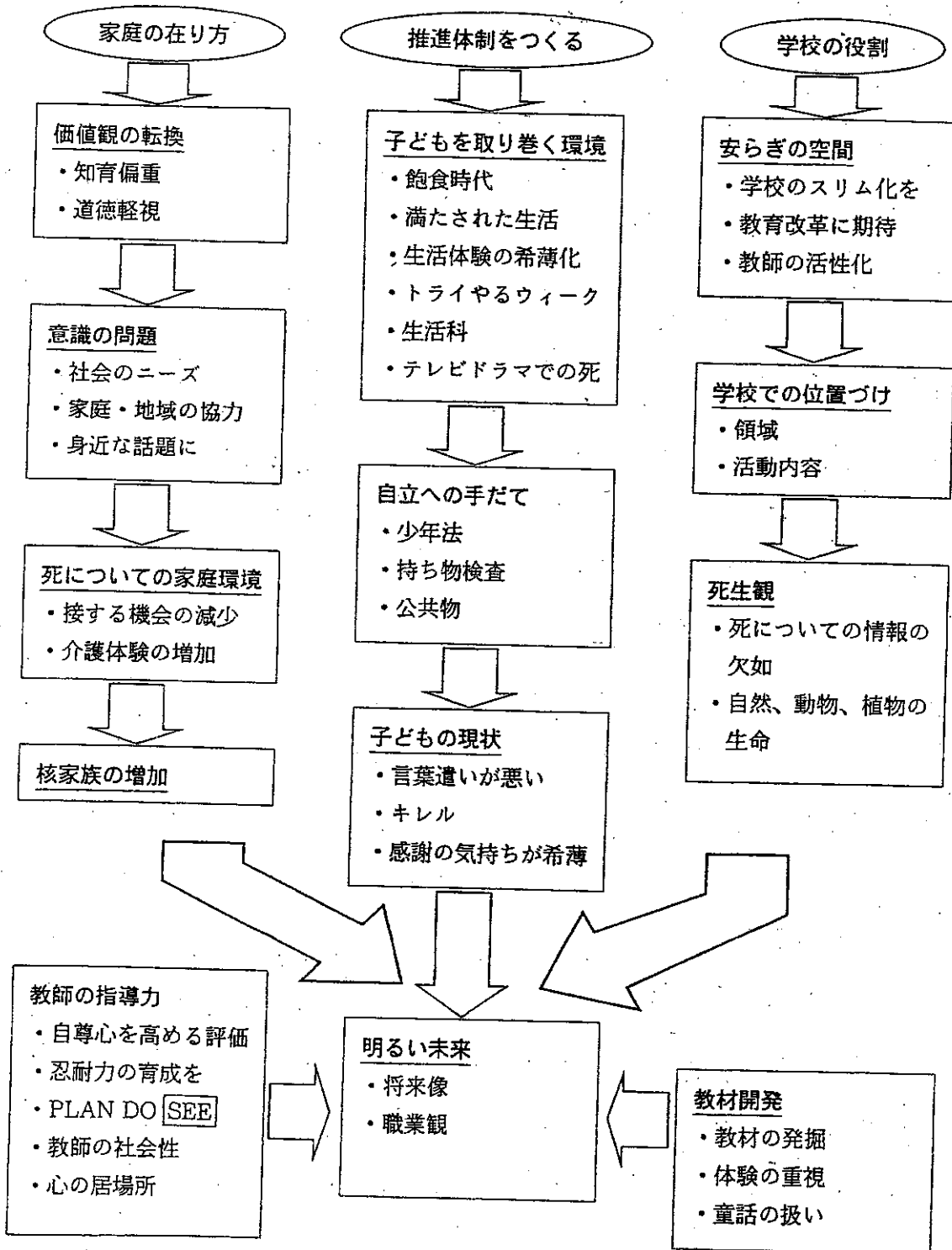
生と死を考える教育の現状と課題



生と死を考える教育を推進するために

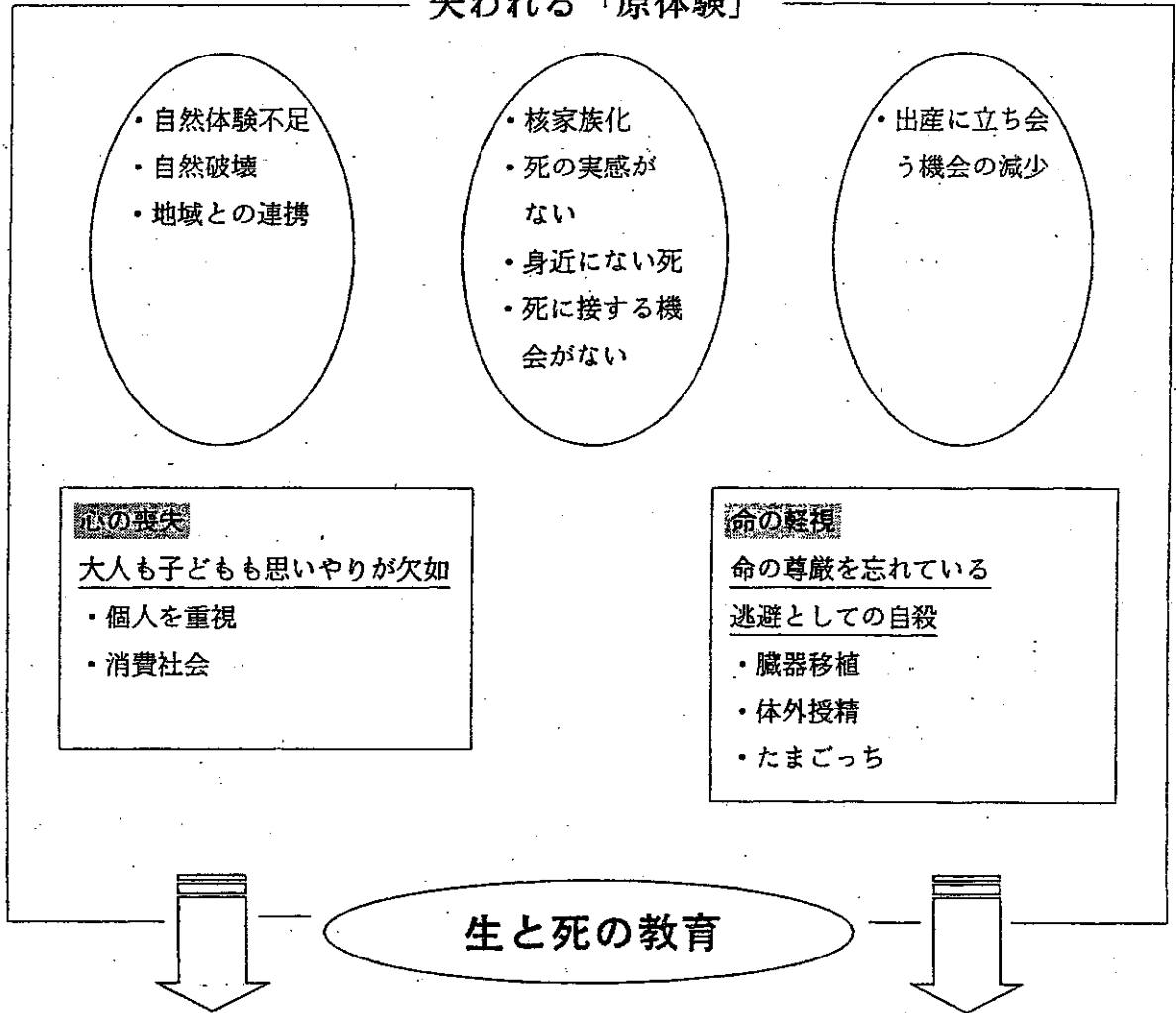


生と死を考える教育の現状と課題



命の輝きを取り戻すために

失われる「原体験」



生と死の教育のバランス
・生きる力の育成
「死」のテーマの難しさ
・校内研修体制
・日本人の死生観
死生観を考えさせる方法
・正しい死生観とは
・宗教との関わり

教育課程上の位置づけ
・教材の選定
・心の教育との関連
ゆとりの欠如
・多忙な学校現場
・学級サイズ